

平成30年 5月24日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770153

研究課題名(和文) 琉球語宮古島北部方言の研究

研究課題名(英文) A study of the northern dialects of Miyako Ryukyuan

研究代表者

衣畑 智秀 (Kinuhata, Tomohide)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：80551928

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、消滅の危機にある琉球語宮古島北部の方言群について、次世代の言語研究にも資するような、文法書、語彙リスト、談話テキストの作成を目指すと同時に、これらの個々の方言の記述が、一般言語学にも貢献しうるものであることを示すことを目的としている。この目的のもと、これまで、宮古狩俣方言の談話テキストを4時間分作成し、テキストをもとに文法記述を行うとともに、宮古諸方言の、係り結び、疑問文、動詞活用、アスペクト表現、指示詞の研究を行って、宮古諸方言の文法・音声の特殊性について明らかにしてきた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to complete a reference grammar, a word list and texts of spontaneous discourse of the northern dialects of Miyako Ryukyuan, which are severely endangered languages, and contribute to the linguistic study of the next generation. At the same time, this project attempted to show the significance of those endangered languages for the general linguistic research. For these purposes, we have so far recorded and transcribed 4 hour spontaneous discourse of the Karimata dialect, and described the grammar of this dialect based on this text. In order to show the significance of the Miyako dialect, we have studied topics such as Kakarimusubi, interrogatives, verbal conjugation, aspectual expressions, and demonstrative pronouns and discussed their characteristics comparing it with other Japonic dialects.

研究分野：日本語学

キーワード：自然談話 宮古諸方言 狩俣方言 係り結び 疑問文 動詞活用 アスペクト 指示詞

1. 研究開始当初の背景

琉球の諸方言はいずれも消滅の危機に瀕しており、宮古諸方言もその例外ではない。ユネスコでは、それらの言語の継承と再活性化のための方策を早急に実施しなければならない旨を発表しているが、言語研究にとっても、これらの言語の消滅をそのまま見過ごすわけにはいかない。特に言語の研究について言うと、一般には方言が流暢に話せると見なされる 70 歳代前半の話者ですら、伝統的な方言の特徴を失いつつある。たとえば、本島最北部の集落の狩俣方言では、60 歳～70 歳代前半の話者は、伝統的な中舌母音 /i/ を [i] で発音し、指示詞の用法も 80 歳代の話者とは異なっていた。よって、言語研究のための調査としては、ここ 10 年ほどが伝統的な方言を研究できる最後の機会になる可能性がある。

このような状況のもと、本研究は特に宮古本島の北部の方言を中心に研究を行うこととした。その理由としては、伊良部島、池間島、大神島といった離島の方言は、近年かえってその記述が進んでいるのに対し (Shimoji 2009、Pellard 2010 など) 本島の方言については大部の文法書が書かれていないこと、本島の中でも記述が進んでいる平良西里の方言 (狩俣 1997) は、文法的に南部の諸方言と共通することが多く、よって、本島北部の諸方言の文法的特徴については、記述が遅れていることが挙げられる。また、本島北部の大浦、島尻、狩俣といった集落は一本の県道に沿って分布しており、それらに異なる特徴が見られた場合、その変化を追跡しやすいという利点があると考えたのもその理由である。

2. 研究の目的

以上のような背景のもと、本研究では、消滅の危機にある琉球語宮古島北部方言について、次世代の言語研究にも資するような、文法書、語彙リスト、談話テキストを作成し、方言を記録していくことを目的とするものである。

また、本研究は、このような個々の方言の記述が、記述のための記述に終わるのではなく、一般言語学的な研究にも資するものであることを示すことも研究目標としている。

代表者はこれまで、主に日本語の歴史を専門とし、その中で、係り結びのあった古代語には、現代語には普通にある間接疑問・不定・選言といった構文がなかったことを発見していた (衣畑・岩田 2010) が、現在も係り結びが使われる宮古諸方言の調査は、この研究をさらに進められる可能性があった。また、二系列と三系列の指示体系が存在する宮古諸方言は、日本語の指示詞の歴史変化を考える上で大きな示唆を与えてくれる可能性がある。このような現象をもとに、方言研究が一般言語学的研究に貢献できることを示すのも、本研究の目的の一つである。

3. 研究の方法

本研究では、沖縄県宮古島市で臨地調査を行った。臨地調査は主に、自然談話の収集およびその書きおこしによる自然談話テキストの作成と、個々の音韻・文法項目についての面接調査からなるものである。

自然談話や面接調査は、伝統方言を話している 80 歳代の高齢の方を対象として行った。ただし、面接調査の時間を短縮するために、まず自然談話資料を作成して、それを元に記述を進め、問題となる部分を面接調査で確かめるといった方法をとった。また、自然談話の書きおこしは、伝統方言の運用能力には劣っても、理解能力のある 60 歳代の比較的若い話者をお願いし、高齢の話者の負担を減らすように心がけた。

4. 研究成果

(1) 談話資料の作成

これまで約 6 時間分の自然談話を収録し、そのうち約 4 時間分については、話者の協力を得て書き起こしを行うことができた。書きおこしは、アーカイビング用ソフト ELAN (<https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/>) を用いて行い、談話音声の書きおこし (音声へのリンク付き、KM)、それを形態素に区切ったもの (KM_morpheme)、その形態素ごとの意味・文法情報 (いわゆるグロス、KM_gloss)、そして、日本語訳 (KM_translation) を入力した (次の図は html に書きだしたもの)。

KM	yomogi=nu paa=yu macci			
KM_morpheme	yomogi	nu	paa	u macci1,2
KM_gloss	ヨモギ	Gen	葉	Acc 混ぜる
KM_translation	ヨモギの葉を混ぜて			

形態素ごとに談話音声区切って情報入力しているため、検索が非常に容易であり、文法項目の記述に大いに活用することが可能である (以下の(4)の研究を参照)。また、ELAN には単語のリストを作成する機能があるので、形態素に区切った注釈層を利用することにより、語彙リストの作成も容易に行える。

ただ一方で問題なのは、この自然談話資料には、話者や話題になっている人物の個人情報も含まれており、全面公開は難しいことである。この点に関しては、調査者の方で、個人情報が含まれる部分か否かを判定したうえで話者に確認し、許可のとれたものを公開していく予定である。既に一部に関しては、以下の 5 . に示すホームページで公開している。

(2) 係り結びの研究

係り結びと不定構文の関係

古代日本語には力による係り結び (「誰をか見たてまつらむ」) はあったが、現代日本語に見られるような力による選言 (うどんか

そばか食べる)・不定(何か食べる)・間接疑問(何を食べたか知らない)はなかった。これらの構文(不定構文)が日本語に出現するのは、係り結びが衰退する中世以降のことである(衣畑・岩田 2010)。

このような係り結びと不定構文の相補性が他の言語でも成り立つかを見るために、現在でも係り結びが使われている宮古諸方言で係り結びと不定構文の調査を行った。宮古諸方言では、中南部の諸方言で、ga(疑問)と du(平叙)による係り結びが残っているが、北部の諸方言では du に統一され、疑問の助詞による係り結びは残っていない。これらの方言で、不定構文に使われる形式を見ると、南部の諸方言では、疑問の助詞 ga が直接不定構文を構成することがないのに対し、北部の諸方言では、一部 ga による不定構文が見られた。よって、宮古諸方言においても、ga(疑問の助詞)による係り結びがあるとそれを不定構文に使いにくく、ga による係り結びがなくなると、それを不定構文に使えるようになると考えられ、日本語の歴史から仮説した相補性を支持していると言える。

この研究は、係り結びがその言語の文法にどのような影響を与えるかを考えた点に、特に新しさがあると言える。

係り結びの機能に関する研究

係り結びと不定構文の関係を調査するために、伊良部島の伊良部集落方言を調査しているときに、一般には文のタイプによって使い分けられるとされる ga と du が、意味的な環境によって使い分けられているということを見つけた。

一般に ga は疑問詞疑問文、du は平叙文に使われるが、従属節では ga と du が疑問詞のある節で交替することがある。その詳細を調査すると、これらは大凡、話し手(や主節の主語)が埋め込まれた疑問文の答えを知らない場合には ga が、答えを知っている場合には du が使われることが分かった。たとえば、次の A と B がそのような例である。

A. [noo=yu=**ga** yummi bui]=gara ssa-n

[何を^{ga}読んでいる]か知らない。

B. [noo=yu=**du** yummi bui]=tii=ya ssizzi=du bui.

[何を^{du}読んでいる]か知っている。

宮古諸方言では、一般に動詞の連体形と終止形の区別がなく、文末の形態との呼応という意味での係り結びは見られないが、このように、節の意味的性質と係助詞が呼応しているという意味での係り結びは残っていると考えることができる。

ただし、このような節の性質との呼応は、どの宮古諸島の方言にも見られるわけではない。方言によっては、意味的な呼応関係が崩れている方言もあり、係り結びの衰退過程をこれまで以上に詳細に示すことができた。

(3) 疑問文のイントネーションの研究

伊良部集落方言での係り結びの調査をし

ている際に、この方言の文のイントネーションに特異性が見られることに気付いた。この方言では、疑問文を発話する際には文末が下降し、平叙文を発話する際には上昇する。つまり、標準的な日本語とは反対のイントネーションのパターンを示す。このような文のイントネーションのパターンは、類型的には非常に珍しいようである(Ultan1978)。

そこで、命令や禁止の文も作り、文末の動詞も入れ替えて 71 のパターンを話者に発話してもらった。すると、疑問文では例外なく文末が下降することが確かめられた。他方、平叙文(命令・禁止も含む)は多くの場合文末が上昇したが、一部下降する文も見られた。

なぜ一部の平叙文で文末が下降するのか、その条件などは不明だが、この研究で、伊良部集落方言が、言語類型的に珍しいタイプのイントネーションを持つことが分かった。また、このような方言は、調査した範囲では、他の宮古諸方言には見られなかった。

(4) 活用形の研究

これまで、宮古諸方言では、語幹末が -k, -g, -b で終わる動詞に、二種類の終止連体形があることが指摘されてきた。「書く」を例に取ると、一つは kaki であり、もう一つは kafu である。これら二つの分布については、前者は宮古諸方言全般に見られるが、後者は伊良部島や池間島のような離島と、本島では北部の狩俣方言にのみ見られるとされてきた。よって、先行研究では、狩俣方言にはこの二つの形が用いられるとされてきたことになる。

そこでまず、本当にこの二つの形が狩俣方言に見られるのかを調査した。調査方法は、まず、(1)で述べた自然談話で見られる動詞を収集し、次に面接調査によって、「書く」「漕ぐ」「遊ぶ」「聞く」「研ぐ」「飛ぶ」の終止連体形が現れると予想される文を尋ねた。その結果、談話においては全て kafu 系統の形が用いられ、kaki 系統が用いられないことが分かった。また、面接調査においても、kaki 系統はほとんどの場合で許容されず、狩俣方言では二つの終止連体形のうち、kafu への統一がほぼ完了していることが分かった。

また、kafu は日本語の連用形に当たる機能(「書きたい」「書きながら」など)も兼ね備えていることから、元々あった終止連体形と連用形の合流が進んでいることが分かった。この合流は、南部の諸方言では kaki へと統一されていることから、活用形の合流は宮古諸方言全般で起こっているが、それが kafu へ統一するか(北部)、kaki へ統一するか(南部)によって方言ごとに異なっており、さらにこの合流は母音語幹動詞(いわゆる一段動詞)にも広がりつつあることが確かめられた。

(5) 存在型アスペクトの研究

存在型アスペクトとは、存在動詞を起源とするアスペクト表現のことであり、日本語では「食べている」「書いてある」などの「～

している」「～してある」がそれに当たる。特に人を主語とする存在型アスペクトは日本語・琉球語諸方言に活発であり、どの方言でもそれを認めることができる。

宮古狩俣方言の存在型アスペクトも存在動詞 *ui*（「ある」に対応）が文法化したものが見られる。また、この方言でも、存在型アスペクトには、進行（*yumi ui*、読んでいる）や結果継続（*sini ui*、死んでいる）が見られ、一見、標準日本語とその機能は変わらないように見える。

ところが、これらの存在型アスペクト形式 *ui* をよく観察してみると、標準日本語とは異なり、形容詞や名詞述語、助詞なども幅広く承けることが分かる。たとえば、次のようなものである（訳は直訳で日本語としては不自然なことに注意）。

- ・ *jubisi=basi=du ui*. (蓄でいる) 名詞
- ・ *ssoo ssu=du ui*. (白くいる) 形容詞
- ・ *naigi naigi=ci=du ui*. (モタモタという)
オノマトペ
- ・ *uti-di=ci=du ui*. (落ちようという)
引用の助詞=*ci*

これらは、それぞれ前接する述語の意味が一時的に存在することを表し、アスペクト的意味を持つと言える。

このような構文は、この方言の存在型アスペクトが、日本語のそれとは異なる経路から発達したことを示唆する。日本語の場合は、動詞だけを承けることから、動詞のアスペクト形式として発達したと言えるが、この方言では、「動詞修飾要素 + *ui*」という単純な構造から発達したために、様々な要素を承けるようになったと考えられる。このような特徴を持つ日本本土方言は見られず、存在動詞の文法化の過程を考える上でも、宮古諸方言を観察する価値があると言える。

(6) 指示詞の研究

狩俣方言の二系列指示詞

宮古諸方言には、*u-*と *ka-*による二系列の指示体系と、*ku-*、*u-*、*ka-*による三系列指示体系が存在する。そのうち、本研究では二系列の指示体系を持つ狩俣方言の指示詞の使用について調査を行った。

調査に当たっては、ビデオカメラを用いて現場指示用法を調べた後、日本語文を方言に直してもらうことで、文脈指示用法についても調べた。文脈指示用法を調べるに当たっては、指示対象について話し手・聞き手が共有している（お互い知っている）か否か、そして、話し手・聞き手から遠いところにあるか近いところにあるかが調べられるように例文を作成した。

その結果、現場指示用法では、話し手の近くは *u-*、話し手・聞き手から離れたものは *ka-*で指示するが、聞き手の近くにあるものは *u-*と *ka-*で揺れが見られた。文脈指示用法では、話者の間で結果に若干の違いが見られたが、傾向としては、共有しているか否かはあまり

重要ではなく、近くにある対象には *u-*が、遠くにある対象には *ka-*が使われることが分かった。

二系列指示詞と三系列指示詞の関係

の狩俣方言の結果は、文脈指示において、*u-*と *ka-*が使い分けられていることを意味する。ところが、宮古本島南部の新里方言や伊良部島の伊良部集落方言を調べてみると、文脈指示においては、どの状況でも *u-*が専用されていることが分かった。つまり、宮古諸方言の中に、文脈指示の用法に方言差が存在することが確認されたのである。

従来、二系列か三系列かという指示詞の数による方言差があることは知られていたが、このような用法による方言差は知られていなかった。この指示詞の数による方言差も考慮すると、狩俣方言のようなタイプと、新里・伊良部方言のようなタイプは、直接一方から他方が派生されたとは考えにくく、別のタイプから両方が派生されたと考えられる。そのタイプとは、現場指示に *ku-*と *ka-*が使われており、文脈指示に新里・伊良部方言のように *u-*のみが使われる体系であると推定されるが、このようなタイプはまだ発見されておらず、今後調査を進めていく必要がある。

(7) その他の音韻・文法の記述

以上、(2)～(6)に述べてきた音声・文法研究と並行して、文のタイプとモダリティ、名詞接辞、動詞活用、アスペクトをはじめとする補助動詞構文の記述も進めている。また、形容詞についても、古典語との対照による研究を発表したが、その後も、談話を中心とした調査を進めている。さらに、文のイントネーションとの関係で、語や句のアクセントについても、データを収集している。これらも、まとまり次第、論文などの形で公開していき、今後、狩俣方言の包括的な記述として提示する予定である。

<引用文献>

- Shimoji, Michinori (2008) A grammar of Irabu: A southern Ryukyuan Language. Ph.D. dissertation. ANU.
- Pellard, Thomas (2010) Ōgami: Elements de description d'un parler du sud des Ryūkyū. Ph.D. dissertation. EHESS.
- 狩俣繁久(1997)「宮古方言」亀井孝他編『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』三省堂
- 衣畑智秀・岩田美穂(2010)「名詞句位置の力の歴史 選言・不定用法を中心に」『日本語の研究』6-4: 1-15
- Ultan, Russell (1978) Some general characteristics of interrogative systems, in H. J. Greenberg ed. *Universals of language*, pp. 211-248, Stanford: Stanford University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

Kinuhata, Tomohide and Yuka Hayashi, On the anaphoric use of demonstratives in Miyakoan, *Japanese/Korean Linguistics* 25, 査読無, 印刷中

衣畑 智秀, 宮古狩俣方言における指示詞使用の個人差, 『福岡大学研究部論集 A: 人文科学編』, 査読無, 17 巻 4 号, 2017 年, pp. 45-50

衣畑 智秀, 南琉球宮古方言の終止連体形一方に見る活用形の合流一, 『日本語文法』, 査読有, 17 巻 1 号, 2017 年, pp. 88-104

衣畑 智秀, 南琉球宮古語の疑問詞疑問係り結び—伊良部集落方言を中心に—, 『言語研究』, 査読有, 149 号, 2016 年, pp. 19-42

衣畑 智秀, 宮古伊良部集落方言の疑問文イントネーション, 『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究成果報告書(3)』, 査読無, 2016 年, pp. 94-106

衣畑 智秀, 係り結びと不定構文—宮古語を中心に—, 『日本語の研究』, 査読有, 12 巻 1 号, 2016 年, pp. 1-17

〔学会発表〕(計12件)

Kinuhata, Tomohide and Yuka Hayashi, On the anaphoric use of demonstratives in Miyakoan, The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference, 査読有, University of Hawaii at Manoa, 2017 年 10 月

林由華・衣畑智秀, 宮古語諸方言における文脈指示のバリエーション, 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会, 査読無(招待), 国立国語研究所, 2017 年 6 月

衣畑智秀, 係り結びと疑問詞の量化—宮古伊良部集落方言の事例から—, 日本言語学会第 153 回大会シンポジウム「方言研究から言語研究へ」, 査読無(招待), 2016 年 12 月

Kinuhata, Tomohide, Interpretation of Wh-words in Aza-Irabu Miyakoan, Logic and Engineering of Natural Language Semantics 13, 査読有, 慶応大学, 2016 年 11 月

衣畑智秀, 存在・アスペクト表現の地理的分布の形成—琉球先島方言を手がかりに—, バリエーションの中での日本語史, 査読無(招待), 大阪大学, 2016 年 5 月

衣畑智秀, 南琉球宮古方言の終止連体形, 第 9 回琉球諸語研究会ワークショップ, 査読無, 琉球大学, 2016 年 3 月

衣畑智秀, 宮古伊良部集落方言の文末イントネーション, 第 263 回筑紫日本語研究会, 査読無, 九州大学, 2015 年 12 月

Kinuhata, Tomohide, Kakarimusubi as a device to determine the sentence type, International Workshop: Kakarimusubi from a Comparative Perspective, 査読無(招待), 国立国語研究所, 2015 年 9 月

衣畑智秀, 宮古伊良部方言の疑問系係り結び, 「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会, 査読無(招待), 大阪大学, 2014 年 12 月

衣畑智秀, 形容詞の複合をめくって—古典語・宮古語の対照—, 共同研究プロジェクト研究発表会「形容詞の記述と問題点」, 査読無(招待), 国立国語研究所, 2014 年 9 月

衣畑智秀, 係り結びがもたらす疑問助詞の分布制約—日本語史と琉球語から—, 日本言語学会 148 回大会, 査読有, 法政大学, 2014 年 6 月

衣畑智秀, 係り結びと不定構文—古典語の制約を琉球語から検証する—, 福岡言語学会 2014 年度第 1 回例会, 査読無(招待), 福岡大学, 2014 年 4 月

〔図書〕(計1件)

岡崎友子、衣畑智秀、藤本真理子、森勇太編 『バリエーションの中の日本語史』, くろしお出版, 「存在型アスペクトの文化のバリエーション—宮古狩俣方言からの示唆—」執筆, 2018 年, 297 頁中 20 頁

〔その他〕

ホームページ等

<https://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/~tkinuhata/project/kaken2014/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

衣畑 智秀 (KINUHATA, Tomohide)
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号: 80551928

(4)研究協力者

林 由華 (HAYASHI, Yuka)
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・特別研究員 (PD)
研究者番号: 90744483